

のゆくえ



安倍元首相を失った自民党はどこへ？

ジャーナリスト
鈴木哲夫



安倍元首相なき自民党 権力闘争

次期総裁選へ向け 新たな権力闘争へ

参院選最終盤の7月8日。遊説中の安倍晋三元首相が銃撃され死亡した。

容疑者は母親が旧統一教会の信者で多額の献金のせいで一家が崩壊。これまでに捜査関係者から明らかになっているのはその恨みを、同教会と親交のあった安倍氏にぶつけたというのが動機だということだ。参院選投票開票が10日、11日に安倍氏の通夜が営まれ、12日には葬儀が行われた。

その翌日の13日の昼、岸田文雄首相と麻生太郎自民党副総裁、茂木敏充自民党幹事長の3人が会食した。

この事態に自民党としてどう対応して行くかを、総裁、副総裁、幹事長の党のトップ3役が緊急に話し合う機会を作るのは当然だ。だが、自民党ベテラン議員はその中身はそれだけではないと話した。

「3人の肩書は確かに党の中心的な3役だが、見方を変えれば3大派閥、岸田派、麻生派、茂木派の会長だ。

安倍元首相は、岸田政権に対しては経済政策や安全保障で一線を画していろいろな意見を言ってきたし、党内の力学も複雑なバランスだった。その安倍首相がいなくなり、今後の党内の権力構図がどう変わるのか、そんな中で岸田・麻生・茂木の3派が

結束して行くという確認が行われたのではないか。9月に予定されている内閣改造、党役員人事などの基本的な考え方も話したのではないか」

もう早くも、安倍元首相なきあとの権力闘争が始まっているということなのである。

岸田派のベテラン議員は、会合して結束をはかった3者は「すでに岸田氏の自民党総裁の任期が切れる2024年9月の総裁選を視野に入れているのではないか」としてさらにこう続ける。

「岸田氏は自民党総裁選に向けた綱引きも頭の中に置いているだろう。参院選後にしばらく衆参ともに大きな選挙がないことから『黄金の3年間』と呼ばれているが、それはあくまでも与野党対野党の構図で語られているだけのこと。自民党内では2年後の総裁選が最大の政治決戦で、岸田氏はいかに再選への環境を整えて行くかが大事になる。でも安倍氏の死去でシナリオはもう1度構



茂木敏充自民党幹事長



麻生太郎自民党副総裁



岸田文雄首相



築しなければならぬ。下手をする
と安倍氏不在によって安倍派の結
束が乱れ、安倍派内にある『反岸田』
の面々が勢いづく可能性も出てき
た。この会食は総裁選に向けた次の
権力闘争が開始した合図と言ってい
い」

安倍氏不在の中で、岸田首相は今
後いかに党内で主導権を握り、総裁
選へ流れを作るか。

そもそも岸田氏と安倍氏の本当の
関係性はどうかだったのか。

安倍氏が死亡した直後のぶら下が
り会見で岸田氏は涙を見せた。

もともと、岸田氏と安倍氏は当選
同期で選挙区も近い。

「初当選以来の親しい友人として
互いに助け合ってきた」(岸田氏)

ただ、岸田氏が総裁選に出馬し、
そのあと首相に就任して以降、その
関係性は少しずつ変化してきた。

「安倍氏の経済政策は積極財政、
憲法改正を急げ、ウクライナに端を
発して防衛費の増額など積極的に発
言し岸田政権に注文をつけてきてい
た」(官邸官僚)

安倍氏の最大の強みはというと、
もちろん最大派閥を率いていたこと

もあるが、それ以上に党内外の保守
層から強い支持を得ていたことが挙
げられる。

自民党の閣僚経験者は、今年春前
から上がってきた岸田政権の内閣支
持率についてこう分析してきた。

「岸田政権の支持率がずっと6割
近くあるが、そのうち3割は安倍氏
の発言がしつかり惹きつけてきた岩
盤のような保守層がさらに強固に
なったこと。そこに、無党派などを

取り込んでいる岸田首相の3割を足
して6割。つまり、岸田首相にして

みれば安倍氏がまとめている3割は
無下にできない。安倍氏を敵に回せ
ない。一方で、安倍氏の主張をすべ
て受け入れてしまえば自身の指導力

を問われる。こうした事情から、首
相はある時は安倍氏と妥協、ある時

は退けるなど、調整に苦心していた。
元々参院選が終われば、2023年
度予算案編成の年末に向けて両氏の

綱引きが激しさを増すとみられてい
た」(前出官邸官僚)

また、安倍氏の側近の1人はこん
なことを明かした。

参院選の最中、遊説を終えて東京
に戻った安倍氏は側近らと会食した

がその場でこんなことを言ったとい
う。

「(岸田氏の)経済政策も安全保障
もどうなのか。参院選が終わったら
また勝負だ」

側近はこれについてこう解説す
る。

「つまり岸田政権の政策に不満を
持っていたということです。勝負とい
うのは、積極財政や改憲、対中国
外交などほとんど発言し、その先に

は岸田氏と全面対決も考えていた。
岸田おろし?そういう言い方もでき
ますね」(安倍氏側近)

もちろんこうした安倍氏の本音を
「岸田さん本人はいろんな話も入っ
てきて十分に感じていた。警戒感

あった」(岸田首相側近議員)という。
裏では2人はけん制し合い、場合に
よっては権力闘争の大きな火種にな
る要素を孕んでいたのだった。

領袖なき

最大派閥が抱える不安

では、安倍氏がいなくなった安倍

派は今後どんな派閥になって行くの
か。

まず注目されたのは安倍派の後継
会長に誰が就くかということだっ
た。

冒頭の自民党ベテラン議員は言
う。

「後継会長と言っても一筋縄では
いかない。安倍氏は本格的にナン
バー2を作ろうとをしなかった。自
分が会長としてトップにいて、自分
がやりたいことをまだまだやるとい
う姿勢だった。派閥内の議員たちを
横並びに評価はしても序列をつけな
かった」

それでも候補として、安倍氏死去
直後には会長代理の塩谷立元文科
相、下村博文元政調会長、萩生田光
一経済産業相、西村康稔前経済再生
相、松野博一官房長官らの名前が挙
がった。ただ、閣僚経験もある他派
閥の自民党議員はこう話す。

「安倍派には『元』も含めて閣僚
や党三役がひしめいている。そうい
う意味では有力者は多いがいずれも
決め手を欠き、衆目の一致する後継
者は不在」





生前の安倍元首相意中の後継者は萩生田氏？

当の安倍派の中堅議員は、派閥内での動きについて明かした。「生前の安倍元首相があえてそれらの中で言うなら、意中の後継者は萩生田氏ではないか。だが安倍氏という強力な後ろ盾がまったくなく

なった中で本人が会長となるのは難しい」

そうした中で浮上したのが集団指導体制。「1人に決めるのは困難。ならば実質的な集団指導体制に移行し、地味だけど会長代理の塩谷立氏も加え、下村氏、西村氏らを中心に暫定的に



人事の折衝窓口は
会長代理の塩谷氏が当たる

も考えられる」(岸田派議員)。

自民党内権力構図

のキーマンは…

こうした中で岸田氏が最も警戒し神経をとがらせるのが菅義偉前首相を中心とする無派閥議員や改革派議員のグループの動きだ。

菅氏は参院選後に無派閥議員を中心に勉強会を発足させる予定だった。安倍氏の事件で「(発足は)喪が明けるまでしばらく時間を置く」(菅氏に近い議員)というが、いざれ立ち上げることになるだろう。そしてその勉強会に連携するの

ただいずれにしろ、後継不在期間が長引けば結束に不安は付きまとい「安倍派の存在感が薄れて行くこと

を言っている余裕はない」(同議員) 結局、7月21日に安倍派は総会を開き当面は会長不在で行くことを確認。実質的な合議体制だ。人事の折衝窓口は会長代理の塩谷氏が当たることを決めた。





神経をとがらせる菅前首相を中心とする無派閥議員や改革派議員のグループ

は、前回の総裁選に出馬した河野太郎党広報本部長、それを応援した小泉進次郎前環境相、多くの二階派とその二階派のエースの武田良太前総務相、さらに、石破茂元幹事長のグループ、森山派も連携する可能性もある。

という。「菅氏を副総理兼特命大臣にする案が岸田首相周辺で囁かれているという話が聞こえてきた。しかし、菅氏が簡単に受け入れるかどうか。とにかく、岸田 vs 菅は対立することになる」(前出菅氏に近い議員)

「これは事実上の派閥と言ってもいい。自民党内の一大勢力となる。しかも、国民的人気と改革の旗を掲げる総裁候補が何人もいる。現に河野氏は次の総裁選への出馬の意思を固めているし、石破氏だって諦めていない。岸田氏にとって最大の敵となる」(自民党ベテラン議員)

安倍氏がなくなったことで、党内での主導権争いや総裁選へ向けての権力闘争は激しさを増して行くことになるが、そこで岸田氏が唯一持つ最強のカードが前号でも取り上げた「解散」なのである。参院選が終わわり、次の国政選挙は3年後の参院選と同年の秋の衆院任期。つまり、今回岸田氏が勝利すれば向こう3年はやりたい放題の「黄金の3年」などと言われる。しかし、自民党ベテラン議員は「それは幻想。現実には安倍氏が死去したこともあって党内の力学は大きく変わり権力闘争になる。そして解散もある」と断言して続けた。

「解散権は岸田氏だけが持っている。解散して総選挙をやって勝利すればそれは文句なく岸田氏の再選を認めざるを得なくなる。総選挙に勝利し国民の信任を得た総裁を変えるなんてできない。解散というのは、岸田氏にこんなに都合のいいカードはない」

総裁選に絡むとなれば、解散の時期はできるだけ総裁選に近い「再来年の夏、通常国会が終わった辺りか」(同ベテラン)という。

統一地方選へ

維新、公明が政権に距離

大きく揺れるのは自民党内だけではない。来年春の統一地方選挙に向けて国会も波乱含みになって行く。まずは日本維新の会。

今回の参院選で議席を倍増させたとはいえ、じつは選挙区の議席は4議席しか獲得していない。

全国的な比例での風は吹いても、全国の地域での組織は脆弱なのだ。

投票票日当日、私は関西テレビの選挙特番で松井一郎代表や藤田文武幹事長と中継を結び話を聞いた。

「野党として与党に及ばなかった。勝利とは言えない」(松井氏)

「前から言っているように我々の目標は来年の統一地方選挙で地方議員を増やし、全国の組織を基礎にして次の総選挙で勝つこと」(藤田幹事長)

参院選前に一対一で話を聞いた取材した柳ヶ瀬裕文総務会長も「参院





選挙区の議席は4議席しか
獲得していない日本維新の会



公明党は「改憲勢力3分の2」に
一定の距離を置いている

「参院選後の幹部の集まりは相当深刻な空気だった。そもそも来年春の党一地方選はうちには特別な選挙。地方組織と学会の結束のために統一選は絶対に負けられない。この比例の挽回、もうあとなない。統一選へ向け支援者の結束をは

選は通過点。いま統一地方選挙の候補を面談し全力で選んでいる。全国組織を元に勝負は総選挙」と話していた。統一地方選にかけている。
次に公明党。
同じ特番で、私は公明党の山口那津男代表に思い切って聞いた。
——多くのメディアが公明党を改憲勢力にカウントして、改憲発議に必要な3分の2に達したと報じている。公明党は本当にそこに入っているのか？
「党首討論などでも言ってきたが、憲法改正についてはどこをどう変えるのかいろんな考えがある。衆参そ

れそれぞれいろいろな考えがある。とにかく（野党も含めて）まずは議論していくこと。（すぐに発議ということではなく）時間がかる」
多くのメディアが今回の参院選で焦点にしていた「改憲勢力3分の2」に一定の距離を置いていることを明言したのだった。
岸田首相は参院選後に記者会見し「（改憲へ）国会での議論をリードしていきたい。できる限り早く発議に至る取り組みを進める」と述べたが、そう簡単に進まないということだ。さらに今回公明党にはショッキングな結果が重なっている。それは比例

票が61.8万1431票とここ10数年で最低だったことだ。
公明党は支援者の高齢化などもあつて組織力の維持立て直しがずっと課題だった。800万票を切ったあと何とか700万票ラインを死守してきたが、2017年の総選挙で700万票を切り、2019年の参院選も653万票とさらに下がった。そこで去年の総選挙は必死で戦い700万ラインを復活させたばかりだった。「私の責任」と山口代表は話しているが、学会幹部は「組織の世代交代やF（フレンド・支持者拡大）がうまく行っていない。公明

党らしさも埋没している」と長期的な要因を明かす。

かつて行くためには「平和と福祉」の看板しかない。そんなときに、憲法9条への自衛隊明記など自民党の改憲案にそのまま乗るようなことはできない」（公明党ベテラン議員）
維新や公明党が統一選を天王山と位置付けていることが分かる。すると、来年の通常国会前半が大揺れになるという。

「地方議会選挙は中選挙区。つまり、維新や公明にとって自民党と戦うことになる。維新などは、最後の1議席を自民党のベテランと争うなんていう場面が多く出てくる。すると、統一選を控えた来年の通常国会では、維新や公明は自民党を批判して対立する政策提言をしたり、法案の賛否だつて対決姿勢で来ることになる。もちろん自民も統一選で戦うわけだから妥協できない。通常国会前半は荒れる可能性が出てきた」
自民党内政局、そして早くも来年の統一地方選挙へ向けての政党同士の駆け引きは、激しさを増すことになる。
(了)

